

書彩風彩

(3)

ロシアの風

「無数の教会を持った
この名高いアジアの町、
この聖なるモスクワはついに
目前に現われた！
もうとうにこの時が来るべき
はずだったのだ」
とナポレオンは言った。



だれもロシアの冬を征服しえたものはいない。

南国の草原を疾駆した18世紀のライオン、ナポレオンでさえ。

1805年。なんの苦もなくドナウに張り出していたロシア軍を撃退してウィーンに入ったナポレオンはそこでもう一人の皇后を得た。

1812年。たつぷりと栄養を吸いこんだナポレオンはロシアの草原へ踏み込んだ。秋の訪れは早い。ナポレオンは微妙に勝勢のリズムを狂わせていた。ボロジノの手痛い打撃。

モスクワは冬だった。

寒さと大火と糧食の欠乏がナポレオンを恐怖に陥し入れる。北風に追われて敗走するナポレオン。80万の兵力は40万に減り、パリに着いた時はわずかの近衛隊だけだった。

逃げ去る敵を追っても無駄だとロシアの総司令官、クトーゾフが言っても誰れも聴かなかった。ロシア軍も又、手負いの獣を追って手痛い打撃をこうむった。戦争の無益さを知っていたのはただ一人クトーゾフだけだった。

貴族と民衆映した「ロマンの王国」

北御門二郎 訳 トルストイ 『戦争と平和』

(くわしくは『戦争と平和の世紀をみつめて』(10~11ページ)をごらん下さい。)

(K)

転換期の世界を前に

斧 泰 彦

20世紀が終わりに近づいたせいか、終末論が一部で流行っている。

お隣の韓国では1992年10月28日の深夜零時に「イエス様が再臨し、信心深い者だけが携挙(空中に舞い上がり天に連れて行かれること)の栄光を与えられるが、サタンに従う者は救われない」と唱えるキリスト教の一宗派の「時限付終末論」が異常なブームを起こし、特に信者の家出、学業放棄、職場放棄、個人財産献納、集団生活に走るなどの事件が続発して大きな社会問題となった。

似たような社会現象は18世紀末、19世紀末にも世界のあちこちで見られたらしい。暦や時計は人間がつくったものだから、そして「神」も「悪魔」もやはり人間が考え出したものだから、継続する時の流れに人工の区切りをつけたところで世界の動きを変えられるわけではないと信じる筆者には奇異な行動と映るのだが、およそ世間には多種多様な考えがあり一見不可思議な行動に出る人が後を絶たないのである。この世から社会的矛盾、不条理、社会的葛藤、絶望感、疎外感がなくなる限り(おそらく無理な注文だろう)、この種の騒ぎはこれからも繰り返し起こるに違いない。それどころか、最近の世界各地における宗教勢力の台頭をみると、よしんば物質的繁栄が実現されようとも、宗教の存在意義はなくなりそうにないことを教えている。

科学技術は飛躍的に発達したといわれながら、私たちを取り巻く現実の世界は、政治、経済が自らの問題を解決できずにいるようだ。たとえば旧ソ連邦が崩壊し、社会主義体制を支えていたイデオロギーを失ったとき、人びとはソ連時代以前の、かつて自らを律していた宗教と民族という存在基盤に立ち返ろうとすがりつく様子が顕著になった。しかも多くの人々がすでに自らの存在基盤の揺らぎつつあることに気づき始めている。ほんとう

に宗教が、政治、経済の領域にまでさらに浸透してゆくのであろうか。紛争解決の手がかりになるどころか、むしろ問題をこじらせる恐れはないのか。そんな疑問に立ち向かい、体制変革の原動力であり、地域紛争の火種でもある宗教と政治のかかわりを捉えようとした本に『宗教から読む国際政治』(日本経済新聞社)がある。西島建男著『民族問題とは何か』(朝日選書)も学生向きの手ごろな解説書とあってよい。どちらも参考文献を豊富に掲げているので、より広く深くさぐろうとする読者の役に立つ。

人工の区切りはともかく、転換期にさしかかった世界は激しく揺れ動く。中高年の女性が目立つカルチャーセンターなど社会人の受講生の間では、いまこうした民族問題、宗教問題に対する関心が驚くほど強い。「あの本では……」「この本では……」と実によく学習しているせいか、しばしば立往生しそうな鋭い質問が飛ぶ。おじさん、おばさんがたの、あくなき好奇心に舌を巻き、ほっと安心もする。

いや、もっと驚くべきは、これだけ情報のあふれる世の中に身を置きながら、自ら知的好奇心を放棄したかにみえる若者たちの読書力かもしれない。知的な刺激と緊張の連続に身をさらすことは、まさに学生時代の特権ではなかったろうか。何か力を出し惜しんで、一見おとなしそうに振る舞うのが現在の流行りなのか。好奇心の世界にどっぷり浸かって、思いっきり多様な可能性を考えてほしい。こんな考えは、古いのか、期待するほうが無理なのだろうか。知的コミュニケーションの成立しない社会は、やはりさびしい。

それでも私は決して今が末世だと信じているわけではないのである。

(おの・やすひこ 教養部教授)

『リゾートの総合的研究』

— 国民の「休養権」と公共責任 —

晃洋書房 1991年

小坂直人

「今日、全国の津々浦々から『リゾート栄えて山河なし』という悲痛な叫び声が聞こえてくる」という書き出しで本書は始まっている。1987年6月に「総合保養地域整備法」(いわゆる「リゾート法」)が公布・施行されて以後、全国でくり広げられたリゾート開発が地域住民と自然環境にもたらしたマイナス効果を説明するのに、これ程ピッタリな表現は他にあるまい。

本書は、主に四国に在住する研究者による共同研究の成果の一つであり、扱っている個別事例は地域的なものであるが、そこから導き出している理論や提言はすぐれて全国的であり、普遍的な内容をもっている。リゾート開発が社会問題化すると同時に、この問題を扱った書物も多数出版される状況にあるが、本書のような体系的叙述はほとんど例を見ない。以下、評者が最も注目した点をいくつか挙げて、本書の紹介としたい。

先ず第1は、我国におけるリゾートはそれ自体まだ概念としても未確立であるという指摘である。たしかに、研究者あるいは一般にも一定のリゾート観は存在している。しかし、その中身は、スポーツ・レジャー・レクリエーション施設や宿泊設備を中心とした、非常に狭い理解が主流であり、従来からの観光業などとの接点を含め、リゾート論の本質的論議はこれからである。

第2に、リゾートの開発主体として、民間資本が中心にすえられている現状に対して、国や自治体の公共責任が曖昧になっている問題点が指摘されている。この点は、いわゆる「第三セクター」によって公共規制が実行できるという主張の当否を検討する際にも重要な論点となる。

第3に、多くのリゾート開発が自然環境や生活環境を悪化させていることから、リゾート開発が結局のところ、リゾート本来の拠り所それ自体を掘り崩しているという指摘である。

第4に、リゾート開発によって過疎からの脱

却＝地域振興が可能となると考えた自治体が、逆にリゾートのための上下水道の整備などにおわれ、本来の地域住民に対するサービスを疎かにするという矛盾が生じているという。

第5に、「国民の休養権」に根ざした「パブリック・リゾート」こそが本来のリゾート開発が目指すべき姿であって、現状のリゾート開発はその否定の上に成り立っている側面が強いという指摘である。したがって、この「休養権」に根ざした「パブリック・リゾート」の実現にあたっては、逆立ちしている現状のリゾート開発の大幅な軌道修正が求められるのであり、その際、国や自治体などの公共責任の担い手の位置づけが決定的とならざるをえない。

以上、紙数の関係で十分に紹介できないのが残念であるが、評者の気づいた点を挙げた。最後に、若干の感想を述べて結んでおこう。

戦後日本における工業優先的開発政策の一つの帰結としてリゾート開発の現状を把握できるように私には思われる。工業優先政策は第一次産業とその地域的担い手であった非都市地域を完全に自立不可能なそれへと変換させ、大都市・工業地域に従属させる構造を作り上げてきた。戦後の国土政策の展開はその具体化過程であった。リゾート開発は、この国土政策によって立ち行かなくなった過疎地域を工業部門の資本蓄積によって溢れ出した資本が最後の草刈場にしようとした所に生じた一つのブームである。この資本の行動に対して、国や自治体などの公共機関がどこまで住民の立場からの規制者たりうるか、ということが問われ続けている。その保証がない限り、働かされ過ぎといわれる日本人が休養施設を手に入れるために、更に一層働き続けなければならない、ということにもなりかねない。

(こさか・なおと 経済学部教授)

他大学図書館・情報機関の利用（相互協力）

レファレンス・カウンターでは、探している資料があいにく図書館にない場合でも、他大学図書館利用のための紹介状の発行や複写文献の取り寄せなどのサービスを行っています。

1. 資料の所在調査

資料の所在調査をいたします。“探している資料が、本学にはないが、他大学・情報機関にないか調べてほしい。”というご要望にお答えします。

本学で所蔵していない資料は、他大学・機関の所蔵目録を使って所蔵を確認します。目録で確認できない場合は、電話、郵便による所在調査を行います。これは国内外の図書館間の相互協力体制によるものです。

2. 紹介状の発行

他大学図書館・機関を利用するには、原則として当館発行の紹介状が必要です。カウンター備付けの紹介状申込用紙には、利用したい特定の資料名か、特定の研究主題をできるだけ詳しく記入して下さい。機関によっては、あらかじめ、利用の許諾、及び、所在の確認や利用日時の連絡を必要とする場合があります。尚、利用先の図書館では、先方の利用上の指示に従って下さい。

3. 文献複写の取寄せ

他大学・機関が所蔵する資料の文献複写を郵便で取寄せることができます。2階カウンターにあ

る「文献複写申込書」に必要事項を記入して下さい。その際、書誌事項（図書：著者、書名、出版社、出版年。雑誌：誌名、巻号、発行年月、著者、論文名）はできるだけ詳しく書いて下さい。

また、その資料を見つける手がかりとなった文献もあれば参考文献として欄に記入して下さい。

尚、コピー代と送料は申込み者の負担となります。

○国外への文献複写依頼

国外への文献複写依頼も受付けています。

カウンター備付けの I. F. L. A (International Federation of Library Associations 図書館協会国際連盟) 発行による International Loan / Photocopy Request Form / sheet (70円) で1論文10枚位までの国外図書館・情報機関への文献複写依頼ができます。

申込みから入手までに要する期間

申込み先	道内	道外	国外
私立大学	1～2週間	2～4週間	
国公立大学	2～4 "	3～6 "	
国外大学等			2～8週間

4. 大学図書館間相互貸借

また、一部の大学図書館間ですが、所蔵資料の



—— 教養部

墜落 高橋和己 河出書房社/雁のたより 丸谷才一/収容所群島1,2 A. I. ソルジェニツィン 木村浩訳/アメリカ合衆国 本田勝一 朝日新聞社/札幌教育史 中山崎長吉 第一法規出版/北海道立文書館史料集7 北海道立文書館編/東南アジアを知る300冊 金子量重 アジア民族造形文化研究所/文学の責任 高橋和己 河出書房新社/さっぽろ文庫60 札幌市教育委員会編/同盟の時代—中国同盟会の成立過程の研究— 中村哲夫 人文書院/保険の社会学—医療・暮らし・原発・戦争— 本間照光 勁草書房/国立歴史民俗博物館10年史 国立歴史民俗博物館編/産廃化学漫話 廃棄物のやさしい化学1 村田徳治/実験化学講座1 日本化学会編第4版 丸善 基本操作1 丸山和博 田隅三生編/20世紀の歴史 第1巻平凡社 政治上1900～45 帝国・革命・全体主義 C. S. ニコルズ編/地理学の旅—地理紀行と学窓随想— 藤岡謙二 大明堂/変革期における人間と社会—現代社会構造の研究— K. マンハイム 福武直訳 みすず書房/論語之研究 武内義雄 岩波書店

貸借を行っています。詳細はカウンターでお尋ね下さい。

5. 道立図書館資料の借受け

道立図書館所蔵の資料を借受けすることができます。本学の教職員、学生が道立図書館の本を借受けたい場合には、原則として本学のカウンター窓口を通して下さい。直接、利用者自身が道立図書館へ出向いても、原則として本の借受けはできません。所蔵調査は、カウンター備付けの所蔵目録で行い、あれば、電話、郵便により借受けを申込みます。到着まで2~7日かかります。着いた本はカウンター内書架に保管し、利用者へ連絡します。

尚、借受け図書の冊数に制限（1館当り貸出枠5冊まで）がありますので、利用状況によってはすぐに借受けできない場合があります。

6. 国立国会図書館資料の借受け

国立国会図書館の資料を借受けすることができます。所蔵調査は、カウンター備付けの所蔵目録で行います。借受け図書の冊数に制限（1館当り貸出枠10冊まで）がありますので、利用状況によってはすぐに借受けできない場合があります。

詳細についてはカウンターにお尋ね下さい。

7. 国外大学・情報機関資料の借受け

本学は英国図書館（British Library）より日本において大学図書館の借受け窓口として認定された数館の内の1館です。これまでも、多くの国内の大学図書館等より英国図書館の資料借受けを依頼され、その借受け代理業務をしてきました。カウンターに借受け申込みのための英国図書館フォームが備付けてあります。申込費用は、現在、1冊当り3,350円（フォーム代金）と英国への返却送料（2,500円位：図書重量による）がかかります。但し、英国図書館で貸出中等の理由により、図書貸出が不可の場合もありますが、その場合には、借受申込料と送料はお返しできません。所在調査は、本学で所蔵する各国の書誌を調査し、他調査機関へ調査依頼をします。また、各国の中心的調査機関や所蔵すると思われる機関へ所在調査を依頼します。

英国図書館や米国議会図書館（Library of Congress）その他の国外大学・情報機関からの借受けについてはカウンターにご相談下さい。

(S)

英国図書館フォーム

教養部 ——— 新着図書

金田一京助物語 堀沢光儀 三省堂/地域からの世界史第3巻 朝日新聞社 中国 下 森正夫 加藤祐三/バトル・オブ・ブラジル『未来世紀ブラジル』ハリウッドに戦いを挑む ジャック・マシューズ 柴田元幸訳 ダゲレオ出版/野呂栄太郎とその時代 鷲田小弥太 北海道新聞社 (道新選書11)/バイオエシックス 生体の統御をめぐる考察 フランソワ・ダゴニエ 金森修 松浦俊輔訳 法政大学出版局 (叢書・ユニベルシタス374)/重大な疑問 懐疑的省察録 エルヴィン・シャルガフ 山形和美[ほか]訳 法政大学出版局/アトラス現代史1 ブライアン・キャッチポール 創元社 激動の20世紀 辻野功[ほか]訳/日本列島の生き立ちを読む 斎藤靖二 岩波書店 (自然景観の読み方8)/デザイン論 ミッシェル・ブラックの世界 ミッシェル・ブラック アヴリル・ブレイク編 中山修一訳 法政大学出版局/やわらかなアラブ学 田中四郎 新潮社/新聞の歴史 権力とのたたかい 小糸忠吾 新潮社/生き残ること ブルーノ・ベテルハイム 高尾利数訳 法政大学出版局

ヒマラヤ紀行・その3

ベースキャンプを後にして

高橋伸幸



ベースキャンプから見上げるチョモランマ東壁は優に3000mをこえ、その極まった所に8848mの世界最高地点がある。とらえどころのないスケールの大きさを前に茫然と立ち尽くしていると、まるでスローモーションの世界にいるかのように雪壁の上を雪崩がゆっくりと落下していく。ローツェからチョモランマへの雪稜は、どす黒いほどの天空に明瞭なスカイラインを描き出し、山頂から立ち昇る雪煙だけが濃紺の空に融け込んでいく。夜の帳りが降り、眩しく輝いていた雪稜が、銀河の横たわる大空にシルエットだけを残す頃、白き神々の座は静寂の世界へと入っていく。

我々の学術班は、登頂隊の成功を祈りつつ一足先に下山することになった。往路でチベット人ポーターにすっかり悩まされた我々は、復路ではすんなりとキャラバンができることだけをひたすら願っていた。しかし、チベット人が相手では物事それほど簡単にいくはずもなかった。荷物分配でのちょっとした手違いから法外の賃上げストライキが始まってしまった。ここでも我々の理屈は通用しない。おまけに予定の詰まっている我々には時間がないが、彼等には持て余すほどの時間がある。絶対的に不利な状況下で、半日に及ぶ交渉ともつかぬ交渉の結果、こちら側の大幅な譲歩でなんとか妥結した。我々の気持ちを余所に、出発後の彼等の足取りは軽く、時には馴れ馴れしい笑顔で接してくる。我々の腹立たしきは余計に募るばかりだ。しかし、この2週間ほどですっかり春に衣替えをした谷間を進んでいくうちに我々の気持ちもいつしか和んでいった。放牧地の日溜りで

はヤクがのんびりと草を食んでいる。集落の近くでは畑の掘り返しが始まっている。

ところで、ここには近代文明もあまり入り込んでいないかわりに、医療の手もほとんど差し延べられていない。たまたま通りかかった集落で、傷口の化膿したチベット人に手持ちの薬をつけてやったところ、その噂を聞きつけ、近郷近在から薬を求めて多くのチベット人が我々のテント場までやってくるようになってしまった。“アムチー(お医者さん)、アムチー”という声がテントの外から聞こえてくる。ちょっとした外傷程度であれば薬をつけてやることもできるが、それ以上のこととなると素人のアムチーには手に負えない。ところが、ある時、一人の母親がやってきて、グッタリとした我子を見せ、何とかしてほしいと哀願する。必死の思いの母親は我子を抱いたままテントから離れようとしな。次の日もやってきた。これにはほとんど参ってしまったが、調度タイミングよくベースキャンプから本物のアムチーが降りてきて、俄かアムチーは解放された。

ヒマラヤの圧倒的な大自然に浸っていた数週間うちに真黒に日焼けし、しかも垢でコーティングされた隊員の顔は、どこから見てもチベット人である。おまけに、近代文明とは縁遠いチベット人との接触で頭の中までチベット化が進行してきたようだ。これから行くラサは、チベット第一の都。カルチャーショックを感じなければよいがと思いつつ、チベット最奥の村を後にした。

(たかはし・のぶゆき 教養部助教授)

新着図書

法学部

国際連合 加藤俊作 慶應通信/物権法の世界 高島平蔵 敬文堂/租税法律主義入門 齋藤稔 中央経済社/子どもの権利条約の研究 永井憲一編 法政大学出版局(法政大学現代法研究所叢書12)/現代法律学体系 成文堂 国際経済法-国際投資-(櫻井雅夫)/刑法理論の探求- 中義勝先生 古希祝賀[記念論文集]中山研一[ほか]編 成文堂/権利 M.フリーデン 玉木秀敏 平井亮輔訳 昭和堂/現代日本の政策過程 中野実 東京大学出版会/民事執行法・民事保全法と供託実務 吉戒修一監修 商事法務研究会/アメリカ革命史研究-自由と統一 齋藤真 東京大学出版会/略式手続の研究 福島至 成文堂/米国反トラスト法の実務 永野辰雄 商事法務研究会/講座現代家族法5 川井健[ほか]編 日本評論社 遺産分割/注釈民法新版26 谷口知平[ほか]編 有斐閣相続1 中川善之助 泉久雄編/資料現代行政法2 室井力編 法律文化社 行政組織法・主要な行政領域/イギリス行政訴訟法の研究 岡本博志 九州大学出版会(北九州大学法政叢書11)

ハンガリーでの英語熱

大江 敏 美



ブダは水、すなわちドナウ川を意味し、ペスト（正確にはペシュト）は温泉。ドナウ川の西側にブダの旧市街と新市街が、東側にペストが広がっている。両側あわせて温泉が100か所以上（入浴には水着が必要）もある。自動車の排気ガスによる大気汚染が悪化しつつあるとはいえ、重厚な町のたたずまいは、歴史の重さを感じさせ、ドナウの川面に華麗な影を映すこのハンガリーの首都は「ドナウの女王」の呼称で親しまれている。また一歩市街を出るとなだらかな丘陵と平原が田園情緒に溢れている。

遊牧民としてウラル山脈南部から西進し、千年前にこの地方に定着したマジャール（ハンガリー）民族は、スラブ民族、ゲルマン民族との混血が進んだとはいえ、幼児のころ蒙古斑の出る人が多いという。僻地で混血のなかった地方では、顔が平面的で体格の小柄なアジア系の特徴をもった人々が住んでいる。

言葉も英語などの系統とは異質で、日本語と比べると語彙の共通性はないが、主語、目的語、動詞という順序は同じである。名前も姓がはじめて、名は後にくるのが日本と同じである。

このマジャール人は世界に1500万人おり、本国には1000万、北隣のスロバキアには60万人、南隣のセルビア共和国には50万人、東隣のルーマニアには190万人、その他となっている。またこの本国の人口の1割弱を占めるのはロマニー（ジプシー）、ユダヤ人、スロバキア人、クロアチア人などで、国内では主要言語だけでも7つが用いられ

ている。

何故こういうことになったのか。それは、ドナウ川とその流域を通して、東からまた西から、幾多の民族集団が移動する際に、この地を通過し傷痕を残して行った上、近隣国から難民などが入ってきたからである。過去50年間に限ってみても、ドイツ軍、ついでソビエト軍が入り基地をもっていた。最終的には、去年6月に5万人のソビエト軍が撤退を完了している。このことから、ナチ・ドイツ、ついでソビエトにちなんだ街路名、広場名が廃止されると共に、学校では歴史教科書が書き直された。

今回の東欧革命後第2外国語として英語がロシア語にとって代わった。学校の外でも英語と市場経済用語の学習熱が盛り上がっている。ハンガリーの経済再建には西側の協力が必要であるし、世界共通語である英語に熱がはいるのは当然である。文化背景的に日本と異なるのは、キリスト教（カトリック、カルヴァン派などのプロテスタント各派、東方正教）の信仰と慣習が社会生活の基盤にあり、その分だけ英語の学習にあたって日本人学生よりも有利ということである。それにしても、日本の学生と同じように、文法も語彙も違う英語を学ぶことは大変なことである。そのうえ、伝統的にハンガリー貴族社会の言葉であったドイツ語・ナカポソドイツ文学の素養もなければならぬという知識階級のかかえる外国語の負担は重い。（おおえ・としみ 教養部教授、8月にブダペスト訪問）

法学部

新着図書

現代法律学講座 14 青林書院新社 民法 6-2 一不法行為法一/法における因果性 H. L. A. ハート T. オレノ 井上祐司[ほか]訳 九州大学出版会(法と国家翻訳叢書)/人身損害賠償の研究 吉村良一 日本評論社/現代不法行為法の展開 加藤雅信 有斐閣/現代日本の支配構造分析 基軸と周辺 渡辺治 花伝社発売: 共栄書房/遅れてきた国民 ドイツ・ナショナリズムの精神史 H. プレスナー 土屋洋二訳 名古屋大学出版会/ヒトラーの世界観 支配の構想 エバーハルト・イエッケル 滝田毅訳 南窓社/コミンテルンの世界像 世界政党の政治学的研究 加藤哲郎 青木書店/英米法辞典 田中英夫編 東京大学出版会/The Laws 20/21 一変容する日米経済の法的構造一 松下満雄[ほか] 東洋堂企画出版社/子ども・家族・憲法 米沢広一 有斐閣(大阪市立大学法学叢書 42)/アメリカの環境保護法 畠山武道 北海道大学図書刊行会/保険業法のあり方 上 竹内昭夫編/北海道における個人情報保護対策に関する基礎的調査研究 個人情報保護対策研究会編 北海道総務部文書課

お知らせ

図書館資料の新配置について

昭和62年に現在の図書館へ移転してから5年が経ちましたが、増加し続ける資料等の事情により、あと数年で収蔵能力の限界が来ると予想されるため、図書館内部での利用者の立場に立った資料利用上の便宜性についての検討を尽くした上で以下の配置図の通り、書庫と開架内の資料を新たに再配置しましたので、お知らせします。

尚、当作業は10月1日～26日の16日間に図書館員延60人、業者延60人、計120人を動員して行い、延移動冊数計は364,000冊でした。

《旧資料配置図》		《新資料配置図》	
階層 M 5	洋書 (分類: 000~999) 57,000冊	判例集・議会議録 12,000冊	階層 M 5 洋書 (分類: 000~999) 45,000冊 和書 (分類: 900~999; 文学のみ) 10,000冊 計 55,000冊
4 F	経済・経営・社会・教育 (分類: 330~999) 自然科学・工学・産業・芸術・言語・文学 64,000冊	和書 10,000冊 分類 900~999 明治前期産業~ 5,000冊	4 F 経済・経営・社会・教育 (分類: 330~899) 自然科学・工学・産業・芸術・言語 46,000冊
M 4	哲学・歴史・政治・法律 (分類: 000~329) 参考図書 (12,000冊) 35,000冊	計 13,000冊	M 4 哲学・歴史・政治・法律 (分類: 000~329) 北海道関係 (主に産業関係)、一部書誌・大学蔵書目録 24,000冊
3 F (開架)	哲学・歴史・自然・工学・産業・芸術・言語・文学辞典 (1,500冊) (内、800冊) 38,000冊		3 F (開架) 哲学・歴史・自然・工学・産業・芸術・言語・文学 語学・文学辞典 (分類: 800~999; 1,000冊) 40,000冊
2 F (開架)	政治・法律・経済・経営・社会・教育 辞典 (分類: 300~399; 1,500冊) 19,000冊		2 F (開架) 政治・法律・経済・経営・社会・教育 辞典 (分類: 000~799; 2,300冊) 20,000冊
M 2	洋雑誌 56,000冊		M 2 洋雑誌 56,000冊
1 F	和雑誌 63,000冊		1 F 和雑誌 63,000冊
地下	受入・寄贈図書、営業報告書、官報 個人文庫、卒論、受入中止雑誌、新聞 論集他 171,000冊 北駕文庫		地下 M 5 → 12,000冊 (判例集・議会議録) 4 F → 5,000冊 (明治前期産業発達史他) M 4 → 13,000冊 (参考図書・大日本史料他) 地下増分計 30,000冊 " 既存分 171,000冊 地下計: 201,000冊 / 北駕文庫

新着図書 — 経済学部

生活様式の経済学 角田修一 青木書店/財政学要説 小林晃 税務経理協会/経営用語辞典 柴川林也編第3版 東洋経済新報社/財政 井堀利宏 牛丸聡 東洋経済新報社/現代日本の流通システム 新しい流通のパラダイムを求めて 三村優美子 有斐閣/経営管理論の歴史と思想 丸山祐一[ほか]編 日本経済評論社/資産の定義と認識 M. C. ミラー M. A. イスラム 太田正博 J. ロック 訳 中央経済社/資本と利潤 石橋貞男 税務経理協会/(詳説)財務諸表論講義 酒井治郎 税務経理協会/現代企業の経営と倫理 鈴木辰治 文真堂/経営組織心理学 松浦健児 岡村一成編 朝倉書店/(ゼミナール)本経済入門 日本経済新聞社編7版 日本経済新聞社/ミクロ経済学入門 林直嗣 世界書院/現代基礎経営学 小林末男[ほか]補改訂版/開発経済学 高木保典 有斐閣/経済学の基礎 蘇畑卓郎 谷口洋志 創成社(社会科学基礎シリーズ6)/(セミナー)経済学入門 石橋春男 関谷喜三郎 税務経理協会/日本経済 八代尚宏 東洋経済新報社/転換期の経営学 稲村毅 仲田正機 中央経済社

〈望郷の夢氷花〉

—もう一つのモスクワ冬物語—

ソビエト解体から早くも1年。

あの厳寒のモスクワの人々はどうなったろう。

NHK特集「モスクワ冬物語」に映し出された人々である。

風邪をひき、やっとの思いでジャムのお湯わりを飲んでいたあの老婦人はどうしたろうか。

同じ頃、同じモスクワで一人の老婦人が世を去っていた。

若き日、と言っても36歳の彼女が、同伴の男性とサハリンの国境の彼方へと消えたのは1938年の1月3日のことだった。

彼らが酷寒のシベリアの中に見出したものは、かつて大黒屋光太夫が出会ったシベリアよりもっと厳しいロシアの冬だったろう。

同伴の男性は銃殺。彼女がロシアで生き残るには最愛の人を裏切ることだったとは。

その人こそ、かつての女優、岡田嘉子。男性は杉本良吉だった。

1940年、西条八十は「たれか故郷を思わざる」を作詞した。彼女はモスクワの放送局でこの曲を聴かなかっただろうか。

なぜだろう。あのトルストイの国、ロシアがかくも厳しい魂の凍る国となったのは。

トルストイが世を去った1910年、レーニンは筆をとって、「ロシア革命の鏡としてのトルストイ」

を書き、その中でトルストイの遺産が「過去になったもの」と「未来に残されたもの」があると述べた。

ロシアに限らず、動乱の気違いじみた20世紀が「平和の春」を見出し得なかったのは「トルストイの遺産」が正當にも人類の魂とはならなかったところにも起因したのではないか。

思えば、岡田嘉子が青春を送った大正時代は「白樺の時代」であったと同時に「情熱の時代」ではなかったか。

島村抱月が主宰する「芸術座」はよくロシアの作家の作品を上演した。

『復活』の劇中歌、「カチューシャの唄」は中山晋平の作曲で世に流れたし、ツルゲーネフの『その前夜』の劇中歌はやはり中山晋平の作曲になった。主演女優、松井須磨子自身この曲を歌った。

突然、島村抱月は急逝する。

後を追って、須磨子は「カルメン」上演中に自殺してしまった。驚いたのは中山晋平だけではなかったろう。

白樺派の作家、有島武郎も又、女性記者と心中してしまう。

岡田嘉子がロシアの国境を越えていったのも当時の人々の目には当然と映ったかもしれない。

同時代の望郷詩人、西条八十、今年生誕100年。

経済学部 ———— 新着図書

新経営管理論講義 後藤幸男[ほか] 増補版中央経済社/長崎から21世紀への提言—21世紀を展望した90年代の企業経営—長崎大学経済学部 社会人講師団 平成3年度 三原泰熙 菅家正端監修/さんすい—いま日本のエネルギーを考える—石井威望[ほか] 電気事業連合会編/人口統計学 岡崎陽一 古今書院/法人資本主義—「社会本位」の体系—奥村宏 御茶の水書房/ポスト情報社会の到来 月尾嘉男 PHP 研究所/IMFと国際債務問題 柴田裕 成文堂(名古屋学院大学産業科学研究所研究叢書6)/金本位制度の経済学 春井久志 ミネルヴァ書房/資本理論序説 中村至朗 晃洋書房/現代世界経済と情報通信技術 菰田文男 ミネルヴァ書房/公的規制の経済学 植草益 筑摩書房/2005年の社会と情報通信 NTT 未来予測研究会編 NTT 出版/パーソナル消費時代のマーケティング戦略情報システム 大橋照枝 TBSブリタニカ/貨幣経済の分析 中山靖夫 東洋経済新報社/現代のドイツ経済統一への経済過程 戸原四郎 加藤栄一編

いつくしみの聖氷花

— 降りしきる紛雪の影に瞳
こらして探し求めた母の残像

『いや、違う。そんなはずはない。
と彼は考えた。
『このいかつい、やせた、蒼白い、
ふけた顔が！ あのひとのはずがない。
これはただあの頃の追憶に過ぎない』。
けれどこの時、マリヤは、
「ナターシャですの」と言った。

人は欠けたものによって偉大となる。
トルストイの場合、それは母であった。

『戦争と平和』はあまりにも大勢の登場人物がい
て読破しえないと投げ出す人は多いだろう。

しかし、この大作はいたってシンプルな構成を
取る。「ナポレオンとクトーゾフ」の戦いの軸をタ
テに、ヨコにはトルストイの父方と母方の家族の
人々がもう一つの軸をつくる。

トルストイがもし母の面影をその瞳に刻印して
いたら、彼は偉大な作家とはならなかったろう。

エレン ギリシャ風の成熟した女性美の典型。
『イーリアス』のヘレーナを想わせる。主人公のピ
エールの最初の妻であった彼女に作者は長い生を
与えなかった。

ナターシャ 若くて、いつも恋の道に迷ってい
る父方、ロストフ家の娘。主人公の一人、ピエー
ルと親友の母方のボルコンスキー家の長男、アン
ドレイと婚約する。しかし、アンドレイは戦場で
の負傷で急逝し、ピエールと結ばれる。

人間春秋

戦争と平和の世紀
みつめて

白樺 野うさぎ

レフ・トルストイ

マリヤ エレンとは対照的な美しくはないが敬
けんな女性。ボルコンスキー家の人。彼女こそは
母の像である。彼女と結婚したナターシャの兄、
ニコライは父の像である。

ブリエンヌ マリヤと一緒にボルコンスキー家
の所領地に住むコケットなフランス娘。娘マリヤ
に厳格だった祖父は彼女がお気に入りだった。

『戦争と平和』を読むもう一つの視点は、彼の人
間観だ。それは「comme il faut」的人間と「非
comme il faut」的人間の類型だ。

前者は生きることに要領のよい、つねに強い者
との距離をコンパスで測るタイプ。後者は生き方
の要領は悪いが何かを求めている人間のタイプ。

前者の代表がワシリー公爵のような人であり、
後者の代表がピエールなのである。

新着図書 — 工学部

窓の外は海 — 大学の将来に向けて — 柳井久義 芝浦工業大学 / 大学等における情報処理教育のための調査研究報告書 情報処理学会大学等における情報処理教育検討委員会編 / [北海道開発局]道路現況調書 平成3年4月1日 北海道開発局建設部編 / [北海道開発局]橋梁、トルネル、立体横断施設現況調書 平成3年4月1日 北海道開発局編 / BASIC による橋梁工学 当麻庄子 共立出版 / 建設業各社研究開発報文目録1990 建設業会研究情報専門委員会編 建設業協会 / [日本放送協会放送技術研究所]研究史'80~'89 日本放送協会放送技術研究所編 / [光産業技術振興協会]協会10年史 光産業技術振興協会編 / Curses ジョン・ストラング 菊池彰訳 哲学出版 (UNIX ユーティリティライブラリ) / 都市・空間・建築の提抛をさぐる — 空間の存在論へ 文化科学高等研究院 (EHESC) 都市文化科学研究センター編 飛鳥建設株式会社開発事業部 / 学校におけるガラスの安全設計指針 学校における板ガラスの安全設計指針策定研究会編 文教施設協会 / 建築家遠藤新作品集 遠藤新

「さてと、この三つの三角形は
相等しい。
いいかよく見ろ、角ABCは……」
令嬢は自分のすぐそばに輝く父の
眼をおびえたように見上げた。

魂の二重らせん

——ヤースナヤ・ポリアーナ学校の日々

来る日もくる日もただウンザリするような退屈な講義の日々だった。教師は紋切り型に「この2項定理を解け」といった具合に。

トルストイはカザン大学を中退したあとで、彼の初期の3部作、『幼年・少年・青年時代』を書いた。特に『青年時代』にはその頃の様子が描かれている。大学は「comme il faut」の人間たち、いわば「上品な優等生」たちの集りだった。

トルストイはそういう種類の人間とは無縁だと感じたのである。彼こそはまさしく「非 comme il faut」の人間類型に属していた。

トルストイの生涯を赤い糸が織りなされている。

一つは創作活動。

もう一つは教育活動であった。

30代のはじめ彼は「ヤースナヤ・ポリアーナ学校」の実践に入る。やがて『戦争と平和』の7年間の中断のあと、『アンナ・カレーニナ』の前後に子供用の教材『アズブカ（初等読本）』を完成し、40代の後半でその改訂版を出版する。

それは、彼がいかに「非 comme il faut」的人間の育成に情熱を注いだかを示す。

ルソーの『エミール』によって眼を開られた教育への情熱は白樺の大地、ヤースナヤ・ポリアーナで赤々と燃えていた。

ロシアの歴史家にとって
(言うも不思議な恐ろしいことだが)
讚嘆と感動の対象になっている。
彼(ナポレオン)はgrand(偉大)である。
しかるにクトーゾフは…。

反戦がんこ トルストイ一徹

——晴耕雨読、球磨の知求人

ロシア文学の大家たちが『戦争と平和』の一句、「あの方素敵な方ね、性を持っていらっしやらないのネ」と訳す下りを「性を超越していらっしやるわ」と訳した北御門二郎氏は野にあってトルストイを耕す球磨の人である。

トルストイがカザン大学を中退したように、彼も又東大を中退した。全く同じ理由、大学のつまらなさの故であった。「真の学問こそトルストイの中」にあったのだ。

原典を読むためにはロシア語を学ばねばならない。ハルピンへ渡る。

やがて招集令状が来た。将校の前で泣きじゃくって徴兵を拒否。見かねた将校は病気を理由に免除してくれた。

「土佐のいごっそう」に「肥後のもつこす」は反骨とがんこの代名詞。

その火の国、熊本は野球の川上哲治、文人の徳富兄弟、学者の北里柴三郎を出す。

「まことの平和、まことの幸わせ」を求めて、トルストイを耕す姿は球磨の知求人そのもの。

『トルストイ3部作』は東海大学出版会から発行されたが、それはおそらく前総長、故松前重義氏とは同郷の間柄だったことによるものだろう。

工学部——新着図書

ビタミンCの知られざる働き 生体への劇的な活性化メカニズム 三羽信比古 丸善(Frontier technology series 33) / 早稲田大学理工学研究所創設五十周年記念誌 早稲田大学理工学研究所 / 上下水道工学 茂庭竹生 コロナ社(土木系大学講義シリーズ14) / 先祖供養と墓 五来重 角川書店(角川選書228) / 二つの戦後・ドイツと日本 大岳秀夫 日本放送出版協会(NHKブックス646) / 男と女の進化論 すべては勘違いから始まった 竹内久美子 / 技術と人間 1983年9月号 臨時増刊 技術と人間 ダイオキシン汚染のすべて / 1984年10月 臨時増刊 ハイテク社会への警告(現代技術史研究会編) / 1982年11月 臨時増刊 コンピュータ問題入門講座(現代技術史研究会電算機部会編) / 日本近代思想大系7 加藤修一[ほか]編 岩波書店 法と秩序 / 建設統計要覧 1992 建設省建設経済局監修 建設物価調査会 / 観光白書平成4年版 総理府編 大蔵省印刷局 / さっぽろ文庫 札幌市教育委員会編 北海道新聞社 59. 定山溪温泉 60. 外国人たち / Inside X 68000 桑野雅彦 ソフトバンク

山と「旅路」と経済学 未完成の編集から その3

また逢う日の風景 — 505MIX によせて 柴田 義人

☆北の国の自然は「別れの日」から早くも四季の色彩を再びかえようとしている。いつになく晩秋の乾いた風情が残っていた札幌も、今朝はすっかり白い季節の訪れである。夜明けの仕事に、スクラップを整理していたら、僕らの敬愛する予科長の宇野親美先生が北海道新聞（昭和23年5月17日）に寄稿された「学生と教育」をみつけた。読み返して改めて感銘を深くした。この珠玉の随想は次のように結ばれている。

「いま日本では、教育体制の外面的改革がある憂うつな姿をもって行われつつある。なぜに明快に敏速に実践されないのであろう。一口にいえば、教育ということが内面的な深さをもって営まれていなかった国の悲劇であると思う。人間生活の内面的な深さを知ろうとしないものはつねにその行動は無責任である。いまやその無責任な言動が民主主義の名を負うていかに業々しくはびこっているか。若い世代はこういう時代の風景の中で自己の精神の歴史を育て上げつつあるのである。」

☆初夏の曇り日の昼下がり、蝦名賢造先生の桑園のお宅に伺った。先生は北海道の『経済白書』や『生活白書』について熱く語られる。それと対照的に、「湿度の高い日は微熱が出ましてね」と病後の先生の体調を案じられる物静かな百合子奥様の温かい思い遣りが印象的であった。

☆去年は、経済学研究科と法学研究科とが一緒の「大部屋」研究室であった。ナナカマドの実が赤く色づく頃、宿願の司法官試験に合格した藤原昇治君が、この研究室にやって来た。「普通のことをしただけ」という無口な彼の話し振りに自信のほどが感じられた。佐藤栄一・中島一郎の両君にも栄冠が輝き、揃って祝盃をあげたのだった。

☆この春には外務省の川上俊之君が西ドイツに赴任することになった。ピキニの「死の灰」の影響なのか、霽が降って、人間が季節の外にあるような、5月初旬の土曜の午後、札幌駅まで彼を見送った。卒業するまで経済的苦労が多かっただけに本当に嬉しそうであった。うすら寒い曇り日のプラットホームにも、このひと時、若草萌えるドイツへの想いが匂うようであった。

☆10月には拓銀の岩田昭博君が1年半振りに

顔を見せてくれた。心なしか東京の生活の疲れが感じられたが、相も変らぬ黒い顔には消え失せない質朴さがあつた。早速、歓迎の宴を開き、再会を喜び合った。その彼が十和田湖の紅葉を楽しんで帰った東京からの「やっとホッとしました」という便りに、彼も、もう「東京の人」かと思った。利尻生まれでシベリア帰りの能條彬さん（郵政省）も、北辺の島を離れた。北海道の地方文化はどうなるのだろうか。もちろん、国文の菱川善夫君のようにこの北の大地に腰を据えて、短詩型評論を試みることも、芸大に進んだ広瀬量平君のように北の思索を音楽で表現することも、また、木村志朗君（朝日放送）や児島仁君（電電公社）のように、「東京の人」が充電した北のエネルギーで活躍することも、期待されるべきことではあるが、やはり一抹の淋しさを禁ずることができない。

☆斜陽がその色をうすくした晩秋の夕暮、仏文の岩宮昭男先生（砂川北高）がヒョッコリ現われた。最近、ゴッホの書簡集の原文を読んでいるという、彼の沈静な中にも熱情を込めた話は、正常とアブノーマルなものへの本質論に及ぶ。ノーマルとはその社会その時代の価値判断にほかならないとすれば、アブノーマルとは何か。

☆この秋新築の日活映画劇場の「ロメミオとジュリエット」は、3週間のロング・ランとなった。もう4年前になるが、前進座が長十郎のロレンス神父で上演したとき、見澤俊明君（法学研究科）と一緒に、ジュリエット・いまむらいずみさんに楽屋でサインしていただいた。夢多き青春の熱い想いの一齣であろうか。その時の帰りの雪道で、冬の夜空に星が瞬いていたことを、今想い出す。また逢う日の風景が、あの頃の風景になってしまった。雪が沈むように降りしきる夜も更けてゆく。それではまた逢う日まで。

(1954. 12. 15)

あとがき：『ハイマート』は1948年（昭和23年）北大予科文類入学者の「同級誌」で、1953年（昭和28年）3月創刊以来6号を数えている。この拙文は、第3号に掲載されたのだが、この度「公開」するために若干構成を変え加筆した。

(しばた・よしと 経済学部教授)

北海学園大学附属図書館報 図書館だより Vol.14 No.3 (通巻123号)

本館 〒062 札幌市豊平区旭町4丁目1番40号 工学部図書室 〒064 札幌市中央区南26条西11丁目
☎(011) 841-1161 本館内線 270-275・279 工学部内線 813・814 印刷所：榊共同印刷